uminohaine@haineclub
MARIASAMAGAMITERU
FAN BOOK
RoseSweets 6
FOR ADULT
ONLY

RoseSweets 6

みなさまごきげんよう♪
海野灰猫です。
早いもので当サークルのマリみて本も
ついに6冊目になりました。
相変わらずのマリみて甘々
百合Hの道を突っ走ってます（爆

最近よくある質問として、
「なぜ灰猫さんが描かれる
マリみてキャラは『生えてない』
のですか？」と言うご質問が
多いのですが・・・・・
はっきり言って描くのが面倒くさい
だけです・・・・げふんげふん。
ホントですよ？決してつ○つ○
がいいとかパ○パ○趣味とか
そういう意味では決して（爆汗

それはさておき、
今後の当サークルの活動ですが、
マリみて以外のジャンルにも
いろいろと挑戦したいと思ってます。
詳細につきましてはHP上にて
順次ご報告させていただきますが、
イベントのほうはこれまで通り、
夏冬コミケをメインに
男性向け創作（18禁メイン）にて
活動していくつもりですので、
今後ともどうぞよろしくお願いします。

それでは『RoseSweets 6』を
お楽しみくださいませ。

薔薇のセレナーデ

海野　灰猫

いらっしゃいませ
松平のお嬢さま

ごきげんよう
祥子お姉さまは？

祥子お嬢さまは
離れの別邸にて
お待ちです

離れの？

あらたまって
お呼びだしなさるなんて
いったいどういうご用件
なのかしら・・・

祥子お姉さまは
こちらかしら
・・・・
あっ・・・・
うっんんっ
やあっ
お姉さまぁっ
っんん・・・
お姉さまっ
んんんんっ
あうっん
祐巳・・・
祐巳・・・・
んんっ

祥子さまに
祐巳さまっ
！
んんっ
うふうっ
お姉さまぁ
だめぇっ・・・・
そんな・・・
あ、あんなことっ
やっ
だめぇっ・・・

カチャ
さ、祥子お姉さまっ
ごきげんよう待っていたのよ瞳子ちゃん
瞳子ちゃ・・・ん
祐巳さま・・・

あなたたちの
仲は知っているのよ
祐巳、瞳子ちゃん

でも祐巳は
瞳子ちゃんにまだ
ロザリオを渡しては
いないのよね？

あ、はい
お姉さま

今ここでロザリオを
渡しなさいとは言わないわ
姉妹の契りを結んでいなくても
あなたたちは姉妹以上の
関係を築いているわ

でも私もこのまま
リリアンを卒業するのは
心残りなのよ
だから・・・

今ここで
愛し合ってみせて
あなたたちの仲を
証明して欲しいの

祥子お姉…
さま？

わかりました…
お姉さまが
そうおっしゃるのでしたら
…

えっ…？
祐巳…さま？

んっんんっ！
んっ！

あっ・・・
やぁっ・・・・
祐巳さまっ
んくっ
んっ
あんっ
んはぁっ
祐巳さまぁっ
・・・・っ

祐巳さまっ
だめっ
祥子お姉さま
の前でそんな・・・
ことっ
ふふ・・・
いつもより
濡れてこんなに
あふれてるよ
・・・・
ああああっ
いやっ
そこはぁっ
はぁぁぁうっ
ああんっ
祐巳さまぁっ

あぅぅっ
祐巳さま
祐巳さまぁっ

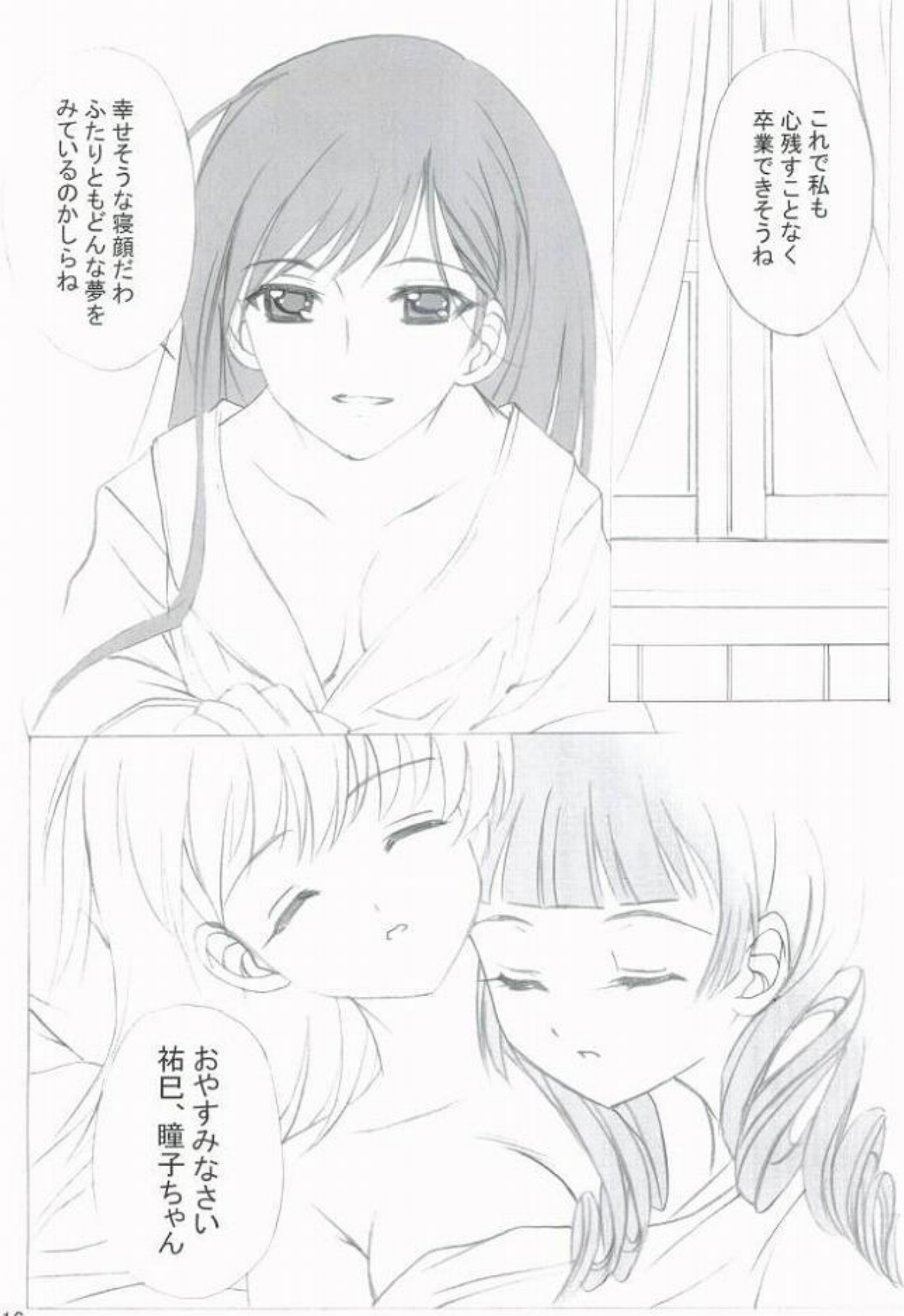
瞳子ちゃんっ
いいっんんっ
あんっあんっ

瞳子ちゃん
私も我慢できなく
なっちゃったの

私のも
舐めてくれる？
お願い・・・・

あふっ
祥子・・・さまぁ
んんふぅっ

瞳子ちゃんっ
もっともっと
あんんっ
ああああ
ああああっ
はんっんっ
いいっ いっ
あはぁっっ
瞳子イクっ
イッちゃうっ
うっ！！
はぁぁぁぁ
あああああんっ
だめえええっ
もうダメええ
ええええっ！！
ああああああ
ーーーーーー
っ！！！！


これで私も
心残すことなく
卒業できそうね
幸せそうな寝顔だわ
ふたりともどんな夢を
みているのかしらね
おやすみなさい
祐巳、瞳子ちゃん

ちょっとお遊び（？）
ネコミミ由乃んです♪
もはや使い古された
ネタかもしれませんが（汗

今回は当サークルのSS作家
童子さんのご紹介で
素敵なゲストをお迎えしております。
サークル『くるめにゃん吉』の
猫屋敷ねこ丸さまです～～♪
こんなにバリめっちゃ可愛い
祐巳たんを描いていただけるなんて
もう死んでも言いというくらい
萌えまくりました。
ねこ丸さま本当に
素敵な原稿を
ありがとうございました♪

●こんにちは。猫屋敷ねこ丸と申します。
童子くん＆灰猫さん、ゲストに誘って頂いて
有難うございました（^-^）
久々にマリみて絵＝祐巳ちゃんを描けて楽し
かったです。
しかし自分が描くとどうもロリっぽくなって
しまうなぁ（笑；）

朱に交わりて

文：童子
絵：海野　灰猫

【朱に交わりて】

――こんな思いをするくらいなら、二度と他人を求めたりしない。

生まれて始めて、私は本気で人を愛した。

栞。お御堂でその姿を見た時から、私の心は奪われていた。

人付き合いも勉強も全てを捨てて、栞にのめりこんでいた。

あの夜――クリスマスイヴの晩に、私達は旅立つはずだった。

駅のホームで、何本の電車をやり過ごしただろう。

改札から続く階段を、何度見たことだろう。

「聖のこと、好き」

栞は確かに、私のことが好きだったはずだ。

その言葉に嘘はないはずだ。

――だったら、どうして

想いは今も変わらない。

けれど、一つだけ変わったことがある。

今の私の側には、何人もの人がいて、私は助けられていると気づいたことだ。

「十一時過ぎだわ。もう、今日中に東京を出るのは無理じゃない？」

駅のホームで栞を待つ私に声をかけたのは、栞ではなく、お姉さまだった。

栞は来ない。

初めは、その言葉を全く理解出来ていなかった。

約束したはずだ。

気持ちばかりが溢れ、今までの栞との記憶が走馬灯のように頭の中を駆けていった。ようやく落ち着いて、この事実に気づいた私の前には、絶望ばかりが広がっているような感覚がした。私は栞に捨てられたのだ。

お姉さまから渡された手紙の中で、栞は自分の意志で旅立ったと言っていたが、それでも私と出会ったことで栞が元々の意思とは違う道を進むことになったことが申し訳なくて。

絶望と、後悔と、懺悔の念と、それでも許しを請いたいと願う気持ちが交錯して。

何が正解なのか、今何をすべきか全く分からなくなっていた。

もし、私に事実を教えてくれた人がお姉さまでなかったら、今頃私は電車に飛び込んでいたかもしれない。

駅を出た後で、十二月の寒い夜中だというのにレストランの前で待っていたのが蓉子でなかったら、私はいつまでも自らが作り上げた、いばらの森の中に引き篭もっていただろう。

つくづく、私は幸せ者だったと思う。

「ハッピー・バースデー！」

今、私はお姉さまの計らいで、お姉さまの家に来ている。

駅からの道にあったコンビニで買い揃えた、チキン、ケーキ、シャンメリー。お姉さまの部屋の小さなテーブルに乗せられ、CDコンポから流れるショパンのピアノの音と共に、三人だけの小さな誕生会を飾り立ててくれた。

絨毯の上で、車座になってテーブルを囲む。蛍光灯の明かりの下で煌びやかに光るシャンメリーを手に、山百合会メンバーによるクリスマス会の様子について話し合う。

しかし、壁時計の鐘が二回鳴った頃。駅で待っていた疲れが出たのか、酔ったかのように頭がグラグラとして私はそのまま後ろに倒れこんだ。

目に直接飛び込んでくる明かりが眩しくて手をかざすけども、それでもまだ眩しい。仕方なく目をつぶると、まぶたの裏に過去の栞と自分の姿が現われた。

お御堂の裏で、抱き合った二人。お姉さまと蓉子からお祝いをしてもらって吹き飛んだはずの栞の記憶はしっかりと私の心を蝕んでいたのだった。

昼休みに外で一緒に御飯を食べたこと、温室で私の肩にもたれる栞を見て雨に止まないで欲しいと思ったこと、キスをして拒絶されたこと。

全てを忘れることなんて、絶対に無理だ。

栞との記憶は「止まれ、止まれ」と思う私の意志とは裏腹に、どんどん溢れ出してくる。

――私にはやっぱり栞との絆を断ち切ることなんて出来ない。

そう思ったら、私の気持ちを代弁するかのように自然と涙が出てきた。

目尻に溜まった涙が顔の横を流れていった。耳の奥がジンジンと痛んだ。

「聖！」

「聖、一体どうしたの！」

私の涙に気づいたのだろう。二人の声が近くに聞こえる。

でも、私には素直に言うことなんて出来なくて――代わりに、二人の腕を抱きしめる。

上体を起こし、顔を覆っていた腕を払って、私は二人の腕をきつく手繰り寄せる。まるで赤ん坊のように、泣きじゃくった。

泣いたのなんて、何年ぶりだろう。

寒い、怖い……気持ち悪い。

泣いている自分を、少し上から客観的に見つめている自分がいた。

そんなもう一人の私から逃げ出すように、私は更に泣いた。助けて欲しいと心から願って。救いの手は背中に回され、ハッとした私が泣き顔のままに顔を上げると、そこには二人の笑顔があった。

一言も出さず、蓉子は私の背をさすってくれた。お姉さまは、私の顔に手を這わせ、零れ落ちる涙を拭ってくれた。

それでも、私は涙を止めることは出来ない。

膿が出ていくように、今まで溜めていた分の涙が出尽くすかのように。堪えきれず再び目を閉じると、唇に熱いものを感じた。

思いがけない出来事に目を開けると、すぐ側に蓉子の顔があった。背中にも体温を感じる。

二人に挟まれて、私の体は少しずつだが体温を取り戻していった。足の先、手の指先にじんわりと血が巡っていく。

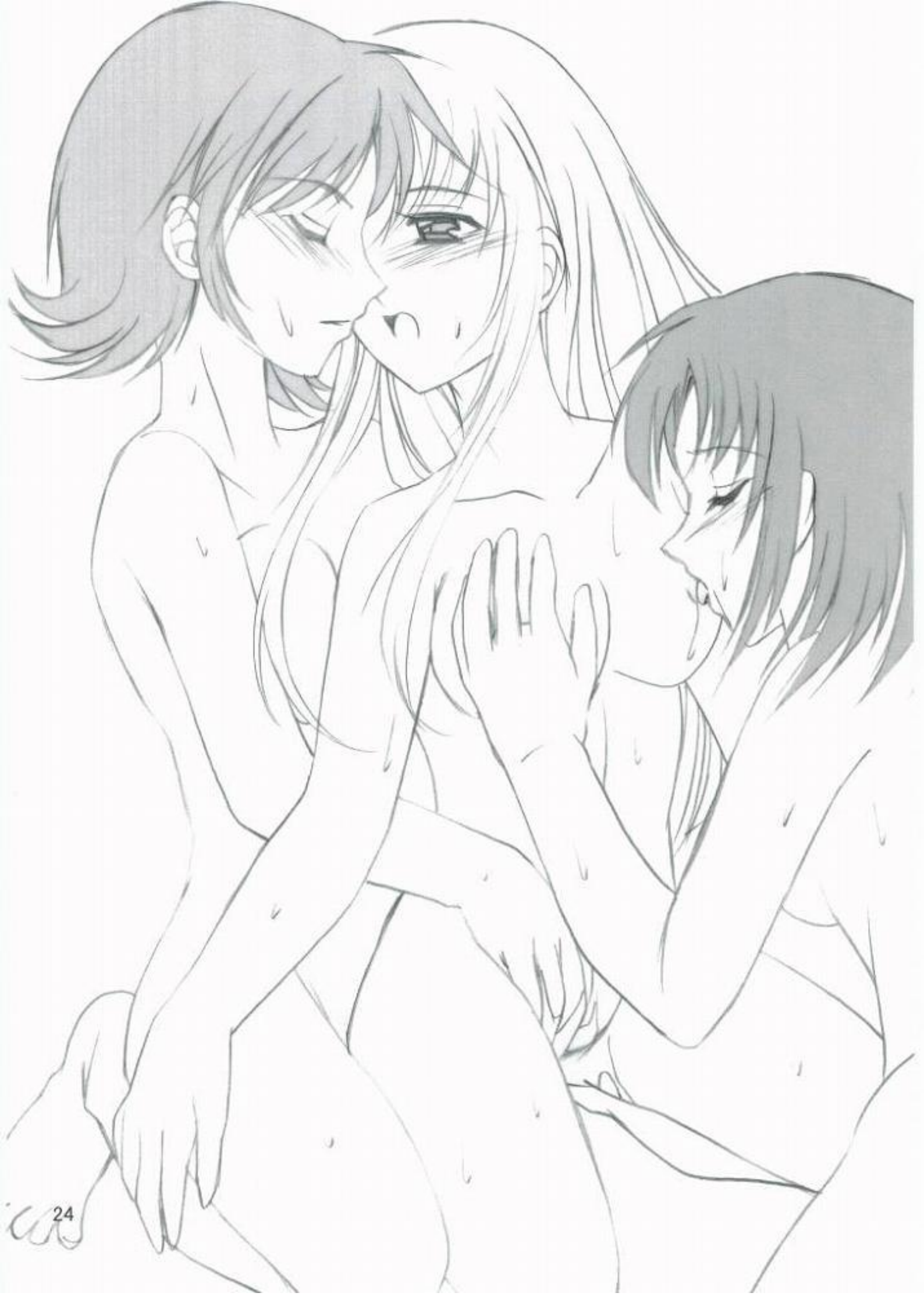
それと共に、私の唇の乾きを潤し温めていたものが、急に私の中に入ってきた。

『ノクターン』の音に紛れて、ぴちゃぴちゃという音が室内に響く。

初めはそれが何なのか分からなかったが、蓉子の舌だと気づいた時には、彼女は既に無防備だった私の歯の間をかいくぐって、私の舌にまで達していた。

熱い蓉子の舌が、私の舌と絡まる。私は驚きからようやく立ち直って

必死で逃れようとするが、蓉子はそれを許してくれない。
更に私の歯の裏をなぞり、それでも追い出そうとしている私のぎこちなさを弄ぶようにして、彼女は舌先に自らの舌先を当ててくる。
そうこうしている間にも、全く意識していなかった下半身に手が触れられるのを感じる。
背後から膝に置かれただけだった手はふとももを一気に這い上がり、秘所まで達した所で留まると、ゆっくりと円を描くように動き出す。
厚いデニムの生地を通してでもはっきりと感じられる体温。その熱が伝わっていくかのように触れられた部分が熱くなり、そのまま秘所の奥へと染み透っていく。
呼応して、奥からじんわりとしたものが溢れていくのが分かる。
「腰、浮かして」
耳の横に近づけられた唇から紡ぎ出される、お姉さまの声。どうしてなのか、腰には全く力が入っていなくて上げるどころか動かすことさえ自分の力では出来なかったのに、耳に当たった息がくすぐったくて。私は思わず腰を上げて膝立ちの姿勢になってしまう。
回された手がジーンズのファスナーを下ろしていく音がかすかに聞こえる。少しきつめのジーンズだったが、お姉さまはゆっくりと焦らずに時間をかけて私の足から抜き取っていく。
部屋の中とはいえ、ひんやりとした外気にさらされた私の足。エアコンの温かな風がそよそよと足の指の間を通り抜けていく。
ジーンズを履いていた時同様に太ももに置かれるかと思って身構えたが、お姉さまの手は予想に反して私の腰に当てられ、着ていたセーターを捲り上げ始める。
執拗にキスを続けていた蓉子が唇を離すと、そのままお姉さまは一気に私のセーターを脱がした。
蛍光灯の明かりの元にさらされているのは、今や黄金色のシャンメリーではなく、水色のブラとセットのショーツのみが身を包む、私の姿だった。
——恥ずかしい。
咄嗟に私は両手で胸を覆い、うつ伏せになるようにして倒れこむと、足をしっかりと閉じる。
「綺麗な姿を見せなさい。お姉さまの命令したことは即決まり、よ」
背けていた顔の先に、お姉さまの顔が飛び込んでくる。
私を嘲るような口調ではあったが、私の肩をしっかりと抱く腕と、髪を静かに梳く指には悪意など微塵も感じられなかった。
スルスルと衣擦れの音が聞こえてくる。
「聖だけじゃ、恥ずかしいのも無理ないよね」
お姉さまの腕の中から少し顔を上げ、声のした方を向くと、私から離れていた蓉子が私同様下着姿になっているのが見える。
「ごめん」
小さな声がかけられ、私の額には温かな唇が当てられる。
お姉さまは再び私の背後に回ると、私のブラのホックを外し、あらわになった胸をゆるやかに揉みしだく。
自分でもお粗末としか思えない小さな胸だったが、お姉さまはその周りを慈しむように指の腹でさすっていく。
ソワソワとした不思議な感覚が背中を走り、それは蓉子が胸の先端にある突起に触れた時に爆発した。



頭を思い切り殴られたような強い衝撃の後に、しびれるような感覚が体中を巡っていく。
ガクガクと小刻みに手足が震える中で、私はフラッシュバックを起こした。
過去の想いの逆流。
かつて、栞とこんな関係になりたいと思った時があった頃の記憶。
止まっていたはずの涙は、再び止め処なく溢れ出し、手足の震えは徐々に大きくなっていった。
それまでの甘美な痺れに代わって、寒気が全身を覆っていく。
「栞！　栞！　栞！」
絶対に口にするものかと思っていた名が飛び出していく。止めることも出来ずに。
「栞！　栞！　栞！」
絶叫に近くなる声を挙げ始める私の唇を塞いだのは、お姉さまの唇だった。
言葉は唇の端から溢れて、もはや言葉にはなっていなかったけれども、それでもその言葉をも塞ぐように、蓉子が私の全身にキスの雨を降らせる。
私はそんな二人を力任せに退ける。
「栞……忘れられそうにないよ……」
口を突いて出た言葉。無意識から出た、私の本心。
「いいじゃない、それなら忘れなくたって」
返ってきた返答は、予想外の言葉だった。
「いいじゃない。あなたには過去があって、私にも過去があって。過去が今の聖と私があるのだから。今の聖のこと、好きよ。聖の今を愛してあげる。過去が作ったあなたのことを、私は愛してあげる。蓉子、あなたもそうでしょう？」
じっと見つめる私の視線の先で、蓉子は大きく頷いてくれた。
頬を一筋の涙がこぼれた。自分はこんなにも涙もろい人間だったのかと思う。
けれど、今ばかりは自分に素直になりたい思った。それまでの頑張った自分を癒すように。
蓉子とお姉さまの腕の中で、私は何度も何度も愛された。肌と肌とを触れ合って、秘部と秘部とを重ねあって。
二人のことを、とても近くにいてくれる人々のことを、私は感じた。
夜が明けたら、美容室に行こうかと思う。
私を覆わんばかりに伸びていたこの髪とも、さよならをする時期だと思う。
確かに、物理的に言えば、栞は遠くへと行ってしまったのかもしれない。
でも、引き換えに栞は私に沢山の人たちを置いていってくれた。
ありがとう。
まだ本心から言えているのかは分からないけれども。
私は、変わっていく。

(Words by　童子
Special Thanks to　ゆうり)

RoseSweets 6

uminohaine@haineclub presents
MARIASAMAGAMITERU FANBOOK